

日本人英語学習者のPragmatic Competence 研究の応用

— 英語教科書に見られる refusal の分析を中心に —

広島大学 深 沢 清 治

はじめに

異文化理解が英語教育の目標の重要な一部と位置づけられ、背景知識としての理解に留まらず、異文化コミュニケーション能力の養成に向けて意識化、行動化を目指した様々な試みが行われている。文法能力の養成に加え、発話の適切さに関わる学習・訓練を行うためには、今後、社会文化的側面の指導項目のシラバス作成、異文化間のものの見方・考え方の相違に起因するcritical incidentsの研究、さらに異文化場面に必要なconsciousness raisingを図るための教室実践が必要となってくるであろう。こうした中で、近年の異なる言語使用者間の語用論的特徴に関する比較研究は、英語母語話者と英語非母語話者との言語使用上の文化的前提の相違点を次第に明らかにしつつある。こうした異文化間語用論(cross-cultural pragmatics)研究の成果をもとにした日本人英語学習者のための教材開発や指導上の工夫が期待される。

本論では、まず、これまでの異文化間語用論研究の中から日本人英語学習者に関する研究を概観する。その上で、異文化への意識化を促進するためのsensitizerとしての教材の役割に注目し、特に高等学校英語オーラルコミュニケーションの教科書の対話テキストをrequest, refusalなどのFTA(Face Threatening Acts)の観点から分析することを通して、英語授業において社会言語学的ニーズをいかに提供できるかを検討することを目的とする。

1. 外国語(英語)教育における異文化概念の変化

外国語(英語)教育における異文化概念は、伝統的な人文科学的概念と文化人類学的概念の二分法から、Robinson(1985)による所産(product)、観念(ideas)、行動(behaviour)の3つのレベルの文化認識を経て、Adaskou et al. (1990)の枠組みの一つに含まれる適切なコミュニケーションを行うための知識・技能と定義する語用論(社会言語学)的意味へと、静的な定義から動的な定義へと変容を見せている。Barnlund and Araki (1985)が述べるように、ある文化内での人間のやり取りを無意識に規定する規則こそが文化であるとする、コミュニケーションの適切さのルールが文化であると定義することができる。このような異文化間でのコミュニケーション・スタイルの違いを認識することにより、より適切なコミュニケーションが可能になるとすると、英語教育内容においても、たとえば文化間で異なる丁寧さの尺度を形成する考え方、価値観などの違いをコミュニケーション・ルールとして具体的に列挙する必要がある。近年のcross-cultural pragmatics/interlanguage pragmaticsの研究は、異文化間での対人間コミュニケーションにおいて英語非母語話者が誤解を生じやすい場面を想定した様々な発話行為におけるpragmatic competenceの特徴を明らかにしてきている。日本の英語教育へ異文化概念の新しい枠組みの応用を図るためにも、まず、日本人の異文化コミュニケーション能力としてのpragmatic competenceの諸相を記述する必要がある。

2. 発話行為別に見た日本人対象の異文化間語用論研究の概観

異文化コミュニケーションの成功・不成功の原因として、文法能力の不足による言語形式の正確さの欠如に加えて、言語使用上の適切さを構成するものの見方・考え方、価値観の違いの理解不足による pragmatic failure の存在が指摘されている(Thomas 1983; Boxer and Pickering 1995)。具体的には「依頼する」、「断わる」、「謝る」などの発話行為場面での対処法に文化の差が見られており、英語母語話者・英語非母語話者の発話行為実現上の違いの研究が1980年代以降、急速に増加してきている。そのうち、特に日本人を調査対象とした主な研究(英語非母語話者対象の研究で日本人を被験者に入れたものも含む)を概観すると、日本人英語学習者の pragmatic competence の特徴は以下のようにまとめられる。

Table 1: Survey of studies of Japanese ESL learners' pragmatic competence

study	speech act	major research findings
Barnlund and Araki (1985)	compliment	compliment less often; less direct and more modest; less frequently in close relations; express non-verbally, keep to themselves or to a third party
Eisenstein and Bodman (1986)	gratitude	generally considered very polite but the responses were incomplete and inappropriate
中田 (1989)	apology/gratitude	apologize for others' spontaneous efforts; apologize/thank for others
Beebe and Takahashi (1989)	disagreement	not always indirect; do not always avoid critical remarks to someone of lower status; use a repeated questioning strategy
Barnlund and Yoshioka (1990)	apology	favor more direct and more extreme forms of apology, offer of compensation
Beebe et al. (1990)	refusal	apologize often and give less specific reasons; make different responses to status unequals

このほかにも「依頼」、「暗示」、「訂正」など多くの発話行為について日本人英語学習者を対象とした実証研究が実施されてきた。無論、こうした研究は各発話行為における日本人の異文化コミュニケーション行動をすべて一般化できるものではなく、さらに、DCTなど研究方法論上の欠陥があることも否定できない(Kasper and Dahl 1991)。しかし、多くの研究結果が広範な経験データを追認しており、将来に渡ってより多くの研究方法で実証データを広角的に補完していく過程での妥当な方法として利用できるであろう。

これまでの異文化間語用論研究の結果から、言語の違いによる文化的前提の違いを特定することができると同時に、このような日本人の異文化コミュニケーションにおける pragmatic failure の事例は、原因別に以下の7種類にまとめられるであろう。

- a) 誤解を回避するための 2 言語能力の不足によるもの
- b) 根拠のないステレオタイプによるもの
- c) 母語（日本語）からの干渉によるもの
- d) 発達上の失敗で経験や言語能力の伸長とともに是正されるもの
- e) 教室における社会言語学的ニーズの少なさによるもの
- f) 過度の一般化によるもの
- g) 不適切な教材や教師の説明により誘発されたもの

このうち、社会的要因や学習者の内的要因によるものに対して、教材の自然さや教師の指導のあり方といった外的要因の方が今後の改善を図るのに容易であろうと考えられる。事実、日本人英語学習者の多くが英語で話すときには場面・状況に関わらず直接的、単刀直入にコミュニケーションを行うように教えられて来ており(Beebe and Takahashi 1989)、また、著者の直観に頼った教材では自然な発話行為実現のためのやりとりとは合わない場合もあることが指摘されており(Boxer and Pickering 1995)、今後の改善のためにも実態を把握しておく必要がある。

3. 英語教科書に表れた発話行為の分析--refusalの場合

(1) 英語のrefusalに見られるsemantic formulas

相手の依頼・申し出を断るという行為は、どの言語においても話者に心理的圧力のかかるface threatening actの一つである。それを円満に対処するための方略は、他の発話行為と同様に、それぞれの言語社会での価値観や考え方を具現していると言える。一般に英語で依頼や勧誘を断る際に用いられる定型表現(semantic formula)について、Beebe et al (1990)をもとにEllis (1994: 179)が次のようにまとめている。

Table 2: Semantic Formulas Used in Refusals

Type	Semantic formula	Example
Direct	1 Performative	I refuse.
	2 Non-performative statement	I can't.
Indirect	3 Statement of regret	I'm sorry.
	4 Wish	I wish I could help you.
	5 Excuse, reason, explanation	I have a headache.
	6 statement of alternative	I'd prefer to ...
	7 Set condition for past or future acceptance	If you'd asked me earlier I'd have ...
	8 Promise of future acceptance	I'll do it next time.
	9 Statement of principle	I never do business with friends.
	10 Statement of philosophy	One can't be too careful.
	11 Attempt to dissuade interlocutor	I won't be any fun tonight.
	12 Acceptance that functions as refusal	Well, maybe.
	13 Avoidance (e.g. silence or hedging)	I'm not sure.

さらに、これらの定型表現の出現には、次のような順序があるとされている。

the positive remark	(e.g. "I wish I could, but,...")
the expression of regret	(e.g. "I'm sorry.")
the refusal itself	(e.g. "I can't come.")

(Takahashi and Beebe 1993)

できれば依頼を受けたいという願望を述べる + 丁寧に謝罪する
+ 断らなければならない理由を言う + (代案を示す)

(小川・Phalon 1996)

「断る」という発話行為についても日本人英語学習者が対象となった研究が数多くなされている。日本人が依頼などを断る際に用いる定型表現の順序、頻度、内容について次のようにまとめられている。

a) order	目下の者からの誘いを断る際には謝る・悔いる表現は省略する
b) frequency	目上の者に対して断る際には、より多くの定型表現を使う
c) content	断る理由をはっきりと言わない・より堅苦しい調子になる

ここにも相手との上下関係の差をより明確に意識し、表現において顕在的に区別しようとする日本語のコミュニケーション・パターンがうかがえる。それと同時に、この価値観が英語でのコミュニケーションに干渉する可能性もあり、指導法・教材の観点からこのような側面が比較文化的あるいは問題解決的に導入できるような教材構成となっているか分析を行う必要がある。

(2) 高等学校英語オーラルコミュニケーションA教科書の分析

(a) 目的

本調査の目的は、分析した英語教科書に要望・依頼・勧誘・提案に対する応答の中で、承諾・拒否の機能表現がどの程度の割合で含まれているか、また、その中で英語の拒否表現の適切な例が含まれているか、さらに教科書中の拒否表現に使われた定型表現の特徴を明らかにすることにある。

(b) 調査資料

調査資料として、口頭でのコミュニケーション場面を中心に編集され、相当の言語材料を使用して多様な発話行為を含むと思われる高等学校英語オーラルコミュニケーションA教科書の中からランダムに選択した12冊を対象として利用した。

(c) 調査方法

各教科書中の本文対話、key expressions等に表れた「依頼+応答(受諾・拒否)」表現を一つのユニットとして抽出し、定型表現の出現順序、頻度、内容、場面、話者間の関係の視点から頻度調査を行った。

(d) 結果と考察

「要望/依頼/勧誘/提案+応答」場面は全部で55チャックにのぼり、量的には2行対話から1ページ対話までの幅があった。そのうち、承諾は37例(67.3%)、拒否は17例(30.9%)、その他どちらとも言えないもの1例(1.8%)で、実に3分の2以上が肯定的回答の例を示すものであった。

続いて、個々の例については、まず、依頼場面の設定がレストランでの対話など断るという発話行為が少ない状況が多いのがわかった。また、1回の対話の中で出現する定型表現は種類が限

定されており、たとえば 'regret + excuse' (e.g. I'm sorry, but I've already made plans.)のように多くとも2種類までであった。さらに、最大の特徴として教科書中の主な場面・状況は登場人物(日本人の生徒)と同年令の留学生との会話という設定が多いのがわかった。日本人は会話において相手との地位の差に対して敏感であるとされているが、地位・年齢差を示した対話・練習問題が少なく、特に練習部分では名前の無いA-B間の対話がほとんどであり、年齢に応じた日本人英語のコミュニケーション・ルールとの比較に言及することが難しいであろう。

これに対して、語用論の視点から適切な対話例として分析教科書に次のようなものがあった。

- Can you listen to it with me now?

- Sorry (regret), I can't. (non-performative) I'm in a hurry. (excuse) Can I borrow the cassette and listen to it at home? (alternative)

また、断る理由をはっきりと言わないとされる日本人の傾向に対して、具体的な理由に言及した練習例も見られた。

- I'm sorry, Betty. (regret) I'm supposed to get a physical tomorrow, and it will probably last most of the day. (excuse) Is Friday Okay? (alternative)

今回の分析は「断わる」という機能のみに限定した調査であったが、適切さという観点をより広く導入するためには言語材料の選択とも合わせながら、年齢差、地位差、場面・状況についてのより多様な対話例を教材に取り入れていく必要がある。今後の教材開発、指導において異文化コミュニケーションに必要な pragmatic awareness を養成する手がかりとなるような記述がさらに増えていくことが期待される。

まとめ

本研究では、これまでの異文化間語用論の研究成果を概観し、それをもとに「断わる」という機能に関する教材分析を行った。さまざまな発話行為において、日本人が英語を話す際にどのように映る(聞こえる)可能性があるのかが、明らかになりつつある。文法規則と比べて語用論規則には個人差があるため絶対的規準を設定することは困難であるが、コミュニケーション能力のうち適切さの観点において異文化理解場面での価値観や考え方の意識を広げることには大きな意味がある。英語教育において異文化コミュニケーションを想定した cross-cultural awareness raising の活動を通して、異文化間での誤解を回避するための方略を修得ことにより、日本人へのステレオタイプも是正されていくであろう。英語学習における pragmatic competence の習得は、より円滑なコミュニケーションの機会を増やすことにつながると考えられ、そのための culture sensitizer としての教材は英語母語話者と英語非母語話者、あるいは英語非母語話者間のコミュニケーションに存在する価値観の多様性への意識化を図る上で、極めて重要な役割を持つと言えよう。

【参考文献】

東 照二『丁寧な英語・失礼な英語』研究社出版, 1994.

小川邦彦・W. Phalon「ワンポイント英会話」『時事英語研究』7月号.

中田智子「発話行為としての陳謝と感謝」『日本語教育』68, 1989, 191-203.

Adaskou, K. et al. Design decision on the cultural content of a secondary English course for Morocco. *ELTJ*, 44, 1, 1990, 3-10.

Barnlund, D. and S. Araki, Intercultural encounters: the management of compliments by Japanese and

- Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16, 1, 1985, 9-26.
- Barnlund, D. and M. Yoshioka, Apologies: Japanese and American styles. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 1990, 193-206.
- Beebe, L. and T. Takahashi, Do you have a bag?: social status and patterned variation in second language acquisition. In S. Gass et al. eds. *Variations in Second Language Acquisition. Vol. 1: Discourse and Pragmatics*. Multilingual Matters. 1989, 103-125.
- Beebe, L. et al. Pragmatic transfer in ESL refusal. In R. Scarcella et al. eds. 1990, 55-73.
- Blum-Kulka, S. et al. *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Ablex, 1989.
- Boxer, D. and L. Pickering, Problems in the presentation of speech acts in ELT materials: the case of complaints. *ELTJ*, 49, 1, 1995, 44-58.
- Chastain, K. *Developing Second Language Skills: Theory to Practice*. Rand McNally, 1988.
- Eisenstein, M. and J. Bodman, "I very appreciate": expressions of gratitude by native and non-native speakers of American English. *Applied Linguistics*, 7, 1986, 167-185.
- Fukazawa, S., Teaching and learning culture with AETs--what cross-cultural pragmatics can tell us. *Bulletin of the Faculty of School Education, Hiroshima University*. 19, 1996, 39-49.
- Harlow, L., Do they mean what they say? *Modern Language Journal*, 74, 1990, 328-351.
- Kasper, G. and M. Dahl, Research methods in interlanguage pragmatics. *SSLA*, 13, 1991, 215-247.
- Kasper, G. and S. Blum-Kulka eds. *Interlanguage Pragmatics*. Oxford University Press, 1993.
- Robinson, G., *Crosscultural Understanding*. Prentice Hall, 1985.
- Scarcella, R. et al. eds. *Developing Communicative Competence in a Second Language*. Newbury House, 1990.
- Thomas, J., Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4, 2, 1983, 91-112.